

西田幾多郎著「善の研究」ワイド版岩波文庫、岩波書店 1991年1月24日刊を読む

完全なる善行

1. (1) アウグスチヌスに従えば元来世の中に悪という者はない。
(2) 神より造られたる自然は凡て善である、ただ本質の欠乏が悪である。
(3) また神は美しき詩の如くに対立を以て世界を飾った、影が画の美を増すが如く、もし達観する時は世界は罪を持ちながらに美である。

2. (1) 試^{こころみ}に善の事実と善の要求との衝突する場合を考えて見ると二つあるのである。
(2) 一は或行為が事実としては善であるがその動機は善でないというのと、一は動機は善であるが事実としては善でないというのである。
(3) 先ず第一の場合について考えて見ると、内面的動機が私利私欲であって、ただ外面的事実において善目的に合っているとしても、決してそれが人格実現を目的とする善行といわれまい。
(4) 我々は時にかかる行為をも賞讃することがあるであろう。
(5) しかしそれは決して道德の点より見たのではなく、単に利益という点より見たのである。
(6) 道德の点より見れば、かかる行為はたとえ愚であっても己^{おのれ}が至誠を尽した者に劣っている。
(7) 或は一個人が己自身を潔^{いざきよ}うする一人の善行よりも、たとえ純粹なる善動機より出でずとするも、多数の人を利する行為の方が勝^{まさ}っているというのでもあろう。
(8) しかし人を益するというにも色々の意味があって、単に物質上の利益を与えるというならば、その利益が善い目的に用いられるれば善となるが、悪い目的に用いられるればかえって悪を助けるようにもなる。
(9) またいわゆる世道人心を益するという真に道德的裨益^{ひえき}の意味でいうならば、その行為が内面的に真の善行でなかったならばそれは単に善行を助くる手段^{そのもの}であって、善行其者ではない、たとえ小であっても真の善行其者とは比較はできないのである。
(10) 次に第二の場合について考えてみよう。
(11) 動機が善くとも、必ずしも事実上善とはいわれないことがある。
(12) 個人の至誠と人類一般の最上の善とは衝突することがあるとはよく人のいう所である。
(13) しかしかくいう人は至誠という語を正当に解しておらぬと思う。
(14) もし至誠という語を真に精神全体の最深なる要求という意味に用いたならば、これらの人のいう所は殆ど事実でないと考える。
(15) 我々の真摯なる要求は我々の作為したものではない、自然の事実である。
(16) 真および美において人心の根本に一般的要素を含むように、善においても一般的要素を含んでおる。

(17) ファウストが人世について大煩悶の後、夜深く野の散策より淋しき己が書齋にかえった時のように、夜静に心平なるの時、自らこの感情が働いてくるのである。

(18) 我々と全く意識の根柢を異にせるものがあつたならばとにかく、凡ての人に共通なる理性を具した人間であるならば、必ず同一に考え同一に求めねばならぬと思う。

(19) 勿論人類最大の要求が場合に由つては単に可能性に止まって、現実となつて働かぬこともあるであろう、しかしかかる場合でも要求がないのではない、蔽われているのである、自己が真の自己を知らないのである。

3. (1) 右に述べたような理由に由つて、我々の最深なる要求と最大の目的とは自ら一致するものであると考える。

(2) 我々が内に自己を鍛錬して自己の真体に達すると共に、外自ら人類一味の愛を生じて最上の善目的に合うようになる、これを完全なる真の善行というのである。

(3) かくの如き完全なる善行は一方より見れば極めて難事のようにであるが、また一方より見れば誰にもできなければならぬことである。

(4) 道德の事は自己の外にある者を求むるのではない、ただ自己にある者を見出すのである。

(5) 世人は往々善の本質とその外殻とを混ざるから、何か世界的人類的事業でもしなければ最大の善でないように思っている。

(6) しかし事業の種類はその人の能力と境遇とに由つて定まるもので、誰にも同一の事業はできない。

(7) しかし我々はいかに事業が異なつていても、同一の精神を以て働くことはできる。

(8) いかに小さい事業にしても、常に人類一味の愛情より働いている人は、偉大なる人類的人格を実現しつつある人といわねばならぬ。

(9) ラファエルの高尚優美なる性格は聖母においてもその最も適當なる実現の材料を得たかも知れぬが、ラファエルの性格は^{ただ}聖母においてのみではなく、彼の描きし凡ての画において現われているのである。

(10) たといラファエルとミケランジェロと同一の画題を^{えら}扱んだにしても、ラファエルはラファエルの性格を現わしミケランジェロはミケランジェロの性格を現わすのである。

(11) 美術や道德の本体は精神にあつて外界の事物にないのである。

4. (1) 終に臨んで一言して置く。

(2) 善を学問的に説明すれば色々の説明はできるが、実地上真の善とはただ一つあるのみである。

(3) 即ち真の自己を知るといふに尽きて居る。

(4) 我々の真の自己は宇宙の本体である、真の自己を知れば^{ただ}人類一般の善と合するばかりでなく、宇宙の本体と融合し神意と冥合するのである。

(5) 宗教も道德も実にここに尽きて居る。

(6) 而して真の自己を知り神と合する法は、ただ主客合一の力を自得するにあるのみである。

(7) 而してこの力を得るのは我々のこの偽我を殺し尽して一たびこの世の欲より死して後^{よみがえ}蘇る

のである(マホメットがいったように天国は剣の影にある)。

(8) 此の如くにして始めて真の主客合一の境に到ることができる。

(9) これが宗教道徳美術の極意である。

(10) 基督教ではこれを再生きりすときょうといい仏教ではこれを見性けんしょうという。

(11) 昔ローマ法皇ベネディクト 11 世がジョットーに画家として腕を示すべき作を見せよといつてやったら、ジョットーはただ一円形を描いて与えたという話がある。

(12) 我々は道徳上においてこのジョットーの一円形を得ねばならぬ。

[コメント]

西田幾多郎先生の主著「善の研究」の中心的な考えを示す「完全な善行」についての論述は、何回読み返しても考えさせられることが多い。ゆっくりと読めば読むほど味わい深い「善の研究」。読書の秋、読書週間の間にでも是非、御一読を。

— 2014 年 10 月 18 日 林 明夫記 —